

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26420641

研究課題名(和文) トスカーナ・リグーリアの歴史的海洋小都市と後背地域・海域の形成に関する研究

研究課題名(英文) Research on the formation of historical small marine cities and hinterland in Toscana and Liguria

研究代表者

野口 昌夫 (Noguchi, Masao)

東京藝術大学・美術学部・教授

研究者番号：90218305

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：トスカーナのティレニア海沿岸とリグーリア海沿岸の歴史的海洋小都市とその後背地域が、各々の小都市のネットワークを介して有機的な関係を保持しながら形成されてきたことと、それがイタリア半島西側の海域の制海権とも関係しつつ、各都市の領域の形成にもつながっていたことを、現地調査と史料・文献の収集、その精査・分析を4年間にわたり続け、地形、経済、政治、宗教の要因を具体的に把握することにより明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Four year's investigations and extensive surveys of historical small marine cities and hinterlands along the Mare Tirreno in Toscana and the Mare Ligure in Liguria, clarified that each cities have formed themselves according to the organic network and relationship with territories of the sea. That was proved by the historical and cartographical documents in order to find out the determinants of geography, economy, politics and religion.

研究分野：工学

キーワード：都市史 イタリア都市形成史 海洋都市 トスカーナ リグーリア

1. 研究開始当初の背景

(1)イタリアでは大都市の研究の蓄積に比べ、量的に都市総体の主要部分を占めて各地域を形成させている小都市の詳細研究は、大きく立ち遅れているとともに、小都市とその周辺領域・海域との関係性に着目する必要があった。

(2)研究開始前年度までの基盤研究の対象は、トスカーナの歴史的海洋小都市であったが、広大なティレニア海域に面するトスカーナとリグーリアへと対象を拡大して、研究を続けていく必要に迫られた。

2. 研究の目的

(1)前年度までの研究・調査から得られた知見と体験を踏まえ、同等の視座と方法を基礎に、対象をトスカーナのティレニア海沿岸とリグーリアのリグーリア海沿岸とし、各地域の特質を明らかにする。

(2)次に各地域の小都市に視点を移し、その歴史と風土が都市の形態と空間の形成に関わってきた様態と過程を明確化する。

(3)最後に複数の歴史的都市が、人工と自然の環境の中で固有の後背地域を形成してきた過程と要因を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)最新の資料・文献は、フィレンツェ大学建築学部都市地域計画学科図書館とジェノヴァ大学建築学部図書館にて複写、データで収集し、図面・航空写真はマイクロフィルム、データで入手する。

(2)史料はフィレンツェ国立文書館、ジェノヴァ国立文書館にて、都市建設に関わる文書、議事録、都市・地域の古図、絵図、19世紀初頭の課税用不動産台帳(カタスト)・地籍図を入手する。

(3)調査地では各小都市の市役所で個別に図面、資料、現行の地籍図を収集した上で、多様な高さや方向からの写真撮影と、必要な部分の実測を行う。また、城砦と市壁・市門の残存状況、広場・街路による外部空間の構成、街路をつくる住居の集合形式を調査し、都市図面上に記録する。

4. 研究成果

1)リグーリア州東部リグーリア海沿岸の小都市と後背地を対象とし、平成26年11月13

日から27日まで、モンテロッソ・アル・マーレ、ヴェルナツァ、コルニリア、マナローラ、リオ・マッジョレ(以上のチンクエ・テルレ地域は1988年世界遺産に登録されている)、レヴァント、ポルトヴェネレの現地に滞在して調査研究を行った。この地域・海域は中世後期にピサ共和国とジェノヴァ共和国が海域支配をめくって、長期にわたる覇権争いを繰り返してきたが、1284年のメロリアの海戦でピサがジェノヴァに敗れて以来、リグーリア海はジェノヴァ共和国の支配下に置かれることになり、海域を通してつながっている隣国のフィレンツェ共和国のトスカーナ支配に重大な影響をおよぼした。その後の16~17世紀のジェノヴァ支配下の海洋小都市と後背地域の形成過程、ならびに東リグーリア海の交易ネットワークの実態を把握することを目的として、現地の各都市の市役所、文書館にて資料・史料を渉猟するとともに、さまざまな地図史料(カルトグラフィア)の収集、写真撮影、部分的な実測を行った。また、ジェノヴァ大学建築学部図書館、ジェノヴァ国立文書館にて、さらなる文献・資料・史料を精査した。この初年度の調査研究の作業を通して、その後の3年間の調査方法と分析方法を確立させるとともに、ジェノヴァ大学建築学部の教授、研究者たちとの交流という今後に繋がる成果を得る事ができた。

2)次年度は、リグーリア州西部リグーリア海沿岸の歴史的海洋小都市と後背地域・海域を対象として、平成27年10月10日から10月22日まで実地調査を行った。調査地は、ジェノヴァの西側(西リグーリア海)のサヴォナ、アルベンガ、アラッシオ、ディアノ・マリーノ、インペリアのポルト・マウリツィオ、サンレモ、ヴェンティミリアなどの海洋小都市である。現地の各都市の市役所、文書館にて史料・資料、地図史料(カルトグラフィア)を蒐集した。また、必要な部分を写真撮影、実測図面作成を行ない、一定の成果を得た。一方で、ジェノヴァ大学建築学部図書館に通い、後背の丘陵地域に点在する中世丘上小都市の資料・文献を閲覧し、データを収集した。その結果、翌年度はリグーリア州北側の内陸部の小都市を対象として、海洋小都市との街道ネットワークの形成に着目する必要があることが判明した。また、今年度対象とした小都市は前年度に対象としたジェノヴァ東側の海洋小都市と異なり、西側のフランス国境に接する地域であるため、フランス系のサヴォイア家(ピエモンテ州、トリノを中心とした王家)の影響が認められた。この地域はジェノヴァ共和国の覇権が遅れて進行したこともあり、特にサヴォナではトリノの都市計画の影響がバロック時代以降、色濃く残っていることが確認できた。一方、アルベンガでは中世都市の構造が古代ローマ以降の川筋の変化に対応して形成された事

実、ヴェンティミリアのように都市が丘上と平地とに二極化して発展していった過程なども明らかになった。どの都市も類似した形成過程は認められず、それぞれに多様な要因による固有の発展段階をもっていることが判明した。

3)リグーリア州西部の歴史的海洋小都市の後背地域に位置する内陸小都市を対象に、平成28年9月26日から10月12日まで現地調査を行った。前年度に対象とした海岸沿いの小都市との交易ネットワークの実態を明らかにすることが目的である。特に内陸の丘上小都市ドルチェ・アックア、タツジア、チェリアーナを集中的に調査した。現地の各都市の市役所、文書館にて史料・資料、地図史料(カルトグラフィア)を収集し、写真撮影、部分実測を行った。一方、ジェノヴァ大学建築学部図書館にて対象都市の文献、資料、データを収集した。その結果、来年度は特にサヴォイア家のトリノ公国が支配してきたピエモンテ州の小都市との歴史的街道のネットワークの形成に着目したピエモンテ州側の調査も不可欠であることが判明した。また、今年度対象とした内陸小都市は前年度対象としたジェノヴァ西側の海洋小都市と異なり、アペニン山脈をはさむトリノとの州境に近接する位置にあることが、その歴史的形成過程に大きな影響をおよぼしていることが確認できた。平成29年3月に、短期だがロンドンの王立建築家協会 RIBA の図書館に通い、英文のイタリア都市史文献・資料(特にリグーリア関係)を収集することができたことも、今後の研究に向けた大きな成果であった。

4)平成29年度10月01日から10月12日まで、リグーリア州に接するピエモンテ州南側の内陸小都市を対象に、これまで調査してきたリグーリア海沿いの海洋小都市とアペニン山脈を越えた後背地域との交易・流通ルートを明確化することを目的として、調査を行った。まず、リグーリア州西部のサヴォーナを再調査し、サヴォイア家が地中海側への出口としてジェノヴァ共和国から奪回しようとし、19世紀にはトリノを中心とするピエモンテ様式の都市計画が実現したことを確認し、そこから街道を北西に向かいリグーリア州とピエモンテ州の境界を越えてモンドヴィに至りそこを調査拠点とした。その後さらに街道を北上し、フォッサ・ノ、サルツォ、ラッコニージを調査してトリノに至り、トリノ工科大学建築学部図書館で資料・史料・画像資料を収集した。その後は別の街道を南下し、アスティ、アルバ、ブラを調査した後、サヴォーナに戻った。また、後日は、リグーリア州最西端のヴェンティミリアからもう一つの重要な街道を北上し、ピエモンテ州のクーネオまでの小都市を調査した。この街道はリグーリア州から途中でフランスに入り、そ

の後ピエモンテ州に入る特殊なルートであるが19世紀以前はすべてイタリア領土であった。全体を通して、アペニン山脈の西端を越えてリグーリア州の海洋小都市を北上すると、ピエモンテ州の内陸小都市はいくつかの街道とその支脈に、両者を交易面で結びつけるために発生し、それは木材などを海側に送るような産業都市と、その中継点となる宿駅都市に分けられることが判明した。

5)以上の成果がもつ国内外の従来の研究に対する特質は以下の点にある。

従来、歴史的に重要な都市が地域の形成とは無関係に研究対象とされてきたが、本研究では地形、経済、政治、宗教の観点から固有の地域を特定した上で、その中に点在する複数の小都市を研究対象として等価に扱っている。

従来は小都市を規模、形態、歴史的 중요度から研究対象とし、地域から自立した存在として捉える傾向が強かったが、本研究では対象とする複数の小都市を固有の地域を形成させる複数の核として捉えている。

従来は専分化して研究されてきた、地域と海域を構成する複数の海洋小都市の航行ルート、制海領域、後背地域の農地、街道といった人工環境と、海洋小都市の周辺海域、半島、島嶼、岬、湾岸、河口、後背地の地勢のような自然環境とを含めた総合的な地域形成史として捉えている。

6)今後の展望としては、ティレニア海沿いのまだ多くの未調査の歴史的海洋小都市と内陸小都市が形成する地域があり、同等の視座で調査を続けていく所存である。特にトスカーナに隣接するリグーリアは、ジェノヴァ共和国が支配した数多くの重要な海洋小都市がネットワークを形成して地域を形成してきたと考えられ、各々が制海権や交易ルートを重要なファクターとして地域を制御してきたはずである。また、リグーリア沿岸の海洋都市は、これまで重点を置いてきたトスカーナ沿岸の海洋小都市とは陸続きであり、また島嶼沿岸の海洋小都市とは僅かな距離で海を介して繋がっているため、今後は地域形成のみならず、海域の形成と領域化という新たな視点を持ち込みたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔講演発表〕(計5件)

野口昌夫、「都市史をひらく」、シンポジウム「伊藤毅先生退職記念イベント：都市史から領域史へ」、招待講演・司会、東京大学、2018年3月。

野口昌夫、「日伊比較から見て都市史に何が可能か」、法政建築フォーラム「建築史の

可能性への挑戦」, 招待講演、法政大学、2017年10月。

野口昌夫、「イタリア・トスカーナ：丘陵都市の歴史と景観」、第一講「シエナの都市形成とカンポ広場」、第二講「未完のシエナ大聖堂拡張事業」、招待講演、飯田市歴史研究所、2017年9月。

Masao Noguchi, 1. Village of Shipping Agents and Shipbuilders in the Island, 2. Residence of rich agricultural agents in the heavy snowfall area、招待集中講義(英語) リムリック大学建築学科(アイルランド) 2017年3月。

Masao Noguchi, ' Casa Tradizionale Giapponese - Clima, Spazio e Societa ' 国際シンポジウム招待講演(イタリア語) ' Forum Giappone / Italia : Design e Territori, Valore delle Differenze Culturali ' イタリア文化会館、2016年10月。

〔図書〕(計2件)

野口昌夫共著、鹿島出版会、「トスカーナ小都市の基層と地域形成」、伊藤毅編『アゾロの都市と建築』、2018年6月出版予定。

野口昌夫共著、明石書店、「イタリア中世都市の形態学」、73頁 - 75頁、高橋進、村上義和編、『イタリアの歴史を知るための50章』、2017年12月。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野口昌夫(NOGUCHI, Masao)
東京芸術大学・美術学部・教授
研究者番号: 90218305